

この子らを世の光に

Let These Children Be the Light of the World

第6回 糸賀一雄記念賞



(財)糸賀一雄記念財団広報誌第6号

平成14年12月25日発行

CONTENTS

理事長あいさつ 2

選考経過説明 3

第6回糸賀一雄記念賞授賞式 4

受賞者記念講演 5

国連ESCAPフォトグラフ 8

シンポジウム「糸賀一雄の思想と実践に学ぶ」 10

レセプションレポート 14

発行 / 財団法人 糸賀一雄記念財団

〒520-3111 滋賀県甲賀郡石部町東寺四丁目1-1 TEL・FAX : 0748-77-0357 E-mail : itogamf@mx.biwa.ne.jp

戦後間もない荒廃した我が国の社会状況の中で、「近江学園」の創立に尽力されました故糸賀一雄氏の志を現在に受け継ぎ、誰もが安心して暮らせる福祉社会の実現を目的に創設されました「糸賀一雄記念賞」は、本年度で第六回を迎えました。

財団法人糸賀一雄記念財団はこれまで、国内外において障害者福祉の分野で顕著な活躍をされている方々を表彰し、人材の育成や奨励を進めてまいりましたが、今後さらに、国内はもとよりアジア太平洋地域における幅広い交流と情報発信、国際貢献を行い、障害者福祉の二十一世紀を切り開く活力の創出に大きく寄与してまいりたいと考えております。

また、故糸賀一雄氏の崇高な思いを引き継ぎ、滋賀県が戦後から今日まで脈々と障害者福祉に取り組んでまいりましたことが高く評価され、国際連合アジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）主催

財団法人 糸賀一雄記念財団 理事長 國松 善次

障害者福祉の21世紀を切り拓く 活力の創出に

によります「アジア太平洋障害者の十年」最終年ハイレベル政府間会合が、十月二十五日から十月二十八日まで滋賀の地で開催されております。

この会議は、「アジア太平洋障害者の十年」の最終成果を評価し、現状と課題を明らかにする中で、更なる障害者福祉の向上を目指す行動計画へ踏み出すための大変重要な会議であり、この会議が成功いたしますよう、県民の皆様とともに支援してまいりたいと考えております。

最後に、「糸賀一雄記念賞」が多くの方々の強力なご支援のもと益々発展し、国内外を問わず障害者の方々の福祉向上に向けての活躍が一層飛躍することを願いますとともに、今回ご受賞の三氏の並々ならぬご努力とご功績に敬意を表するとともに、今後引き続き、大いに活躍されますことを祈念申し上げます。

Profile

國松 善次 くにまつ よしつぐ

滋賀県知事

昭和13年4月1日生まれ。滋賀県出身。昭和34年4月大阪府入庁。退庁後、中央大学法学部へ入学。昭和51年4月滋賀県入庁。健康福祉部長、総務部長等を経て、平成10年7月、滋賀県知事に就任。趣味はサイクリング、旅行。座右の銘は「明るく楽しくたくましく」。



ごあいさつ

本年、第六回目の糸賀一雄記念賞は、国外から十九人、国内から五人の計二十四人について推薦がありました。

今回、第六回の受賞者については、ESSCAP（国連アジア太平洋経済社会委員会）、アジア太平洋障害者の十年「最終年ハイレベル政府間会合の滋賀県大津市での開催を記念して、国内はもとより、アジア太平洋地域で障害者福祉の分野で顕著な活躍のあった三名の方々を、去る八月二日に開催した選考委員会で選考し、引き続き開催された理事会で決定しました。

その方々は、フィジー諸島のセタレキ・セル・マカナワイ氏（男性・三十七歳）と、ベトナムのフィン・ヴァン・カム氏（男性・六十一歳）、そして日本の中西由起子氏（女性・五十四歳）の三名です。

セタレキ・セル・マカナワイ氏は、十代の時のスポーツ事故で全盲になりましたが、一から学び直し、盲学校の教師となり、現在はフィジー盲学校の校長を務めておられます。様々な慈善団体での無報酬奉仕を行い、障害者の自助努力を促し、支援とサービスを提供するなど、その若い実践行動力は、将来の障害者福祉分野のリー

糸賀一雄記念賞 選考委員会 委員長 大谷 藤郎

「アジア太平洋障害者の10年」 最終年ハイレベル政府間会合の開催を 記念して、顕著な活躍のあった3人を決定

ダーとして期待されています。

フィン・ヴァン・カム氏は、副知事、知事時代には障害児、孤児問題、母子保健活動等に精力的に取り組み、障害児の治療、特に口唇裂・口蓋裂の手術を、日本の口唇・口蓋裂協会と協力して、〇〇例以上行われました。また、母子手帳の改善・普及などの母子保健活動の推進により、未熟児出産や乳幼児死亡を改善させるなど実践活動に専念されました。現在はベンチエ省児童基金会長として、貧困な状況にある子どもや障害児に対する援助・支援活動に尽力されています。

中西由起子氏は、一九七三年に聖心女子大学大学院英文科卒業後、同大学研究所副手、日本赤十字中央女子大講師、国際障害者年日本推進協議会秘書、ESSCAP障害者問題専門官等を歴任し、二〇〇〇年からはJICAイシュー別支援委員会「障害者支援」委員会委員を務められています。また、障害者の立場に立って、日本でのアジア全般に対する関心が薄かった頃から、ESSCAPや障害者インターナショナルにおける活動の中で活躍されています。

Profile

大谷 藤郎 おおたに ふじお

国際医療福祉大学総長
大正13年3月27日生まれ。滋賀県出身。
昭和27年京都大学医学部卒業。昭和34年厚生省入省。昭和58年医務局長を最後に退官。現在、高松宮記念ハンセン病資料館長、予防医学事業中央会理事長、長寿科学振興財団理事長を兼任。
平成5年WHOレオン・ベルナル賞受賞。
趣味は絵画。座右の銘は「一隅を照らす」。



選考経過説明

糸賀一雄記念賞授賞式

3名の受賞者には、財団の國松理事長より賞状が授与されました。



▶近江学園の園生から花束を受け取るフィン・ヴァン・カム氏。



フィジーの女性社会福祉大臣アゼナダ・ザウザウ氏と握手を交わすマカナワイ氏。

授賞式には近江学園園生の三人が花束のプレゼンターとして登場しました。また、マカナワイ氏の受賞を祝して、フィジーの女性社会福祉大臣アゼナダ・ザウザウ氏が会場に駆けつけ、固く握手を交わす場面も見られました。

糸賀一雄記念賞

障害者の基本的人権の尊重を基本に、生涯を通じて障害者福祉の向上に取り組んだ故糸賀一雄氏の心を受け継ぎ、障害者やその家族が安心して生活することができる福祉社会の実現に寄与することを目的として、障害者福祉の分野で、顕著な活躍をする者に対して「糸賀一雄記念賞」を授与する。

Congratulations on Your Prize !



中西 由起子氏

(54歳 / 東京都)

アジア・ディスアビリティ・インスティテート (ADI) 代表

20余年にわたりアジア太平洋の障害者を支援。早期から国連 ESCAP や国際 NGO 障害者インターナショナル (DPI) における活動の中で障害者グループとのネットワークを培い、アジア障害者のお母さんとして活躍。



フィン・ヴァン・カム氏

(61歳 / ヴェトナム社会主義共和国)

ベンチエ省児童基金会長

副知事、知事時代を通して障害児、孤児問題、母子保健活動等に精力的に取り組む。障害児の治療では、特に口唇裂・口蓋裂の手術を、日本の口唇・口蓋裂協会と協力して1,000例以上行ってきた。



セタレキ・セル・マカナワイ氏

(37歳 / フィジー諸島共和国)

障害者インターナショナル・アジア太平洋支部オセアニア担当副会長

10代の時、スポーツ事故で全盲となるが後に盲学校の教師となる。様々な慈善団体での無報酬奉仕を行い、障害者の自助努力を促し、支援とサービスを提供するなど、カリスマ性のある指導者として、今後の活躍が期待される。

私が太平洋にある諸島の、発展途上国から選ばれた最初の受賞者であることに非常に大きな意味を感じます



フィジー諸島^b

セタレキ・セル・マカナワイ 氏
Mr. Setareki Seru Makanawai

障害者インターナショナル・アジア太平洋支部
オセアニア担当副会長



発展途上国から選ばれた
最初の受賞者として

本日、栄誉ある第六回糸賀一雄記念賞の受賞者の一人として、こうして皆さんの前でお話させていただくことは、とても大きな喜びであり、栄誉であり、そして何にも増して非常に大きな意味を持つことです。というのは、私が太平洋にある諸島の、発展途上国から選ばれた最初の受賞者だからです。できることならば、今後も私に続いて、太平洋上の諸島の人々が受賞できることを願わずにはられません。

もしESCAPで働いている私の友人の推薦がなければ、私はこの場にはいなかったでしょうし、この栄えある賞のことも、太平洋の島々では知られないままであったと思います。私が今日ここに立っているのは、すべて神の意志であり、神が計画されたことだと信じています。

糸賀一雄記念賞の受賞者となるためには、障害者福祉の分野で特別な活動をしなければなりません。私の場合は、地方、国、地域、および国際レベルの障害者組織で多くの事業に取り組み、

力の限り働いてきました。そうしてきたのは、力一杯働くことで、様々な種類の障害をもつ私の兄弟姉妹とも言える人々の生活の質を向上させ、またその人たちのロールモデルとな

る必要があると考えたからです。

障害者が、差別や否定に
悩まなくてもよい社会を

しかし、私が障害者福祉の道に本当に駆り立てられたのは、一九八一年の三月、十七歳の誕生日を迎える少し前に、私自身視力を失い、障害者として様々な辛い経験をしたことがきっかけです。それ以来、私はフィジーの障害者のために何かをしなければならぬと真剣に考えてきました。私に次ぐ障害者たちが、健常者や社会制度による差別的な風習、否定的な態度に悩まなくてもよい社会にしたいと願ったのです。

一九八五年にフィジーにあるコーパス・クリスティ教育大学を卒業し、小学校の新任教師になった時、私は、そんな思いで胸がいっぱいでした。あれから十七年の歳月が経ち、祖国でも障害者をめぐり、歓迎すべき変化がおきつつあることを感じています。また、特にこの四年間、私はアジア太平洋の他の国々、そして機会さえあれば、他の地域の諸国にも赴き、このような私の考えを広めるチャンスに恵まれました。

今日の受賞を、自分の道を歩む
勇気に変えて

ここで、今日まで私を支えてきてくれた多くの方たちと組織について申し上げたいと思います。この方たちの存在がなければ、今日の受賞も無かったです。

まず、私がフィジーや海外での障害

者の能力開発と障害者運動に深く関わるようになってからの十二年間、いつも私の傍らで支援を惜しまず、深い理解と忍耐をもって私に接してきてくれた妻と三人の子供たちに心から感謝したいと思います。次に、世界盲人組合、障害者インターナショナル、インクルージョン・インターナショナル、太平洋諸島盲人協会、フィジー障害者協会、ESCAPおよびJICAの皆様に、国家や地域、国際レベルでの障害者福祉プログラムに参加し、そこで指導力を発揮する機会をお与えくださったことに、心よりの感謝をささげます。さらに、私の勤務先であるフィジー教育省には、福祉関係のワークショップやセミナー、会議に出席するため、招待があれば地域の内外を問わず常に有給休暇をとって出かけることを許していただきました。厚く御礼申し上げます。

そして、最後になりましたが、何よりも感謝申し上げたいのは、第六回糸賀一雄記念賞の受賞者として私を選んだくださった糸賀一雄記念財団の皆さん方です。この賞を受賞したことで、私は今まで自分が歩んできた道が間違っていないのだと、確信を深めることができました。そして今後、活動を続けていく上での様々な困難に立ち向かう勇気をもたらすことに何よりも感謝します。

どうか、神のお恵みがここにいらっしゃる一人一人と、そしてその家族の上にありますようお願い申し上げます、私の記念講演を終えたいと思います。

彼らとともに働くことが、どれほど私にとって 嬉しいことであったかを考えると、 私には糸賀一雄氏の言葉が よく分かる気がします



ベトナム・ベンチェ省・
フィン・ヴァン・カム 氏
Mr. Huynh Van Cam
ベンチェ省児童基金会長

多くの方々の支援に
感謝を申し上げます

二〇〇二年度の糸賀一雄記念賞の受賞は、私にとって非常に名誉であり、本日は本当に感激しています。糸賀一雄記念賞は、障害者のために長年尽くしてきた人間を、大変勇気づけてくれる賞です。この場をお借りして、選考委員会の皆さん、また今年度の受賞者の決定に当たられたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

今回の私の受賞は、私一人のもので決してありません。多くの方々の支援があつて初めて得られたものであり、私の同僚と、とりわけ日本の「ベトナムの子ども達を支援する会」(S.V.C.A)の皆さん、そしてベトナムの障害児を支援していただいている「日本口唇・口蓋裂協会」の皆さんにお礼を申し上げます。皆さんは、常に私を支え、支援し続けてきてくださいました。また、この機会に私を糸賀一雄記念財団に推薦してくださいました高谷清先生(医師・第一びわこ学園前園長)に心より感謝申し上げます。先生からは、これまで多くの力添えをいただけてきました。

糸賀氏の思想は、我々にとって
夜道を照らす松明^{たなまつ}のよう

受賞の報告を受けてから、糸賀一雄氏のことを知るようになり、日本はもとより世界中の障害児のために福祉を増進しようとされた氏の偉大さに、知

れば知るほど尊敬の念を深めています。

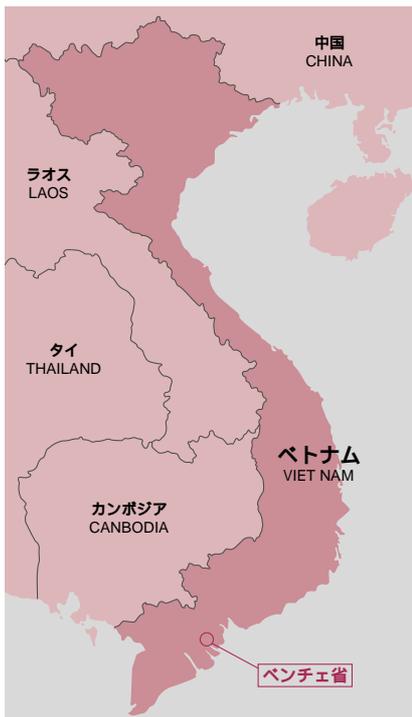
糸賀氏の思想は、障害者福祉に携わる世界中の人々にとって、夜道を照らす松明(たなまつ)のようなものです。私は、生活に困窮している人々、障害のある人々、親を亡くした子どもたちとともに人生の大半を過ごしてきましたが、このような仕事を続けてきたのは、単に社会に対する私の義務や責任を果たすためだけではなく、私にとって非常に素晴らしいチャンスであると思えたからです。障害者や支援を必要とする子どもたちから、どれほど多くのことを私は学んだでしょう。また、彼らとともに働くことが、どれほど私にとって嬉しいことであつたかを考えると、私には糸賀一雄氏の言葉がよく分かる気がします。すなわち、「私たちが障害者に光をもたらすのではない。障害者が私たちに光をもたらすのだ」という言葉の意味を、私は深くかみしめ共感しています。この言葉を、私の心に深く刻み込み、残る人生の指針にしていきたいと思えます。

障害者の幸福のために、
力を合わせて働いていきたい

現在、ベトナムには多くの障害者がいますが、特に障害を持つ子どもや、オレンジ枯れ葉剤(有毒なダイオキシンを含む薬品)の影響によって苦しむ子どもたちの福祉が課題になっています。

私は、ベトナムの障害者の福祉を増進させるため、今後も努力を傾注していきます。まず、この賞の資金の一部は、ベンチエ省児童基金の活動のために役立てたいと思います。また、障害者の幸福のために、私たちが力を合わせて働いていきたいと思っています。

最後になりましたが、皆さま方のご健康とご幸福、そして今日の授賞式を成功を心から祈り申し上げます。また、世界中の障害者の幸せを願っています。ありがとうございました。



ベンチエ(Ben Tre)省...人口約135万人。
省都はベンチェ(Ben Che)

アジア・ディスアビリティ・インスティテート (ADI) がめざす障害者支援のあるべき姿について



東京都・
中西 由起子氏
Ms. Yukiko Nakanishi

アジア・ディスアビリティ・インスティテート (ADI) 代表

適正技術による障害をもつ仲間への支援を

国際的な技術協力への関心が高まる中、経済協力においては、先進国の技術の移転が必ずしも第三世界の人々の経済的自立にはつながらず、むしろ環境や資源に過度の負担をかけるというマイナスの側面が顕著となりました。そこで出てきたのが「適正技術」という考え方です。これは先進国の先端技術を第一とする従来の在り方を変革するもので、その範疇には、適正技術の促進や定着を促すための社会構造の改善や、教育・意識の改革も含まれます。

障害の分野でも、国際協力は先進国と同様の先進的かつ大規模な施設の建設が中心になっていました。その結果、一九八〇年初めのWHOの発表では、障害者の一、二%しかそのサービスを受容できず、経済協力で指摘されていた弊害が、障害者を中心とする社会開発においても見られました。

このような中、ADIの発足にあたっては、国際技術協力の場へ障害をもつ人々が参加する重要性と、それが真の社会開発に貢献する方策を議論しました。障害者のニーズを知っているのは障害者自身であり、供与された技術を有効に活かせるのも障害者自身です。供与されるべき適正技術とは、別の言葉で言えば技術的に重要であり、経済的に実行可能であり、文化的に許容され、環境にやさしいという4条件を満たすもので、つまり、地域で調達可能な資材や人材、技術力、地域社会への貢献の度合いを考慮しなければなりません。

今後、CBRに自立生活の概念を導入していきたい

これに合致するのが、当時WHOを中心に

途上国で採用され始めたCBR（地域に根ざしたりハビリテーション）です。CBRは、サービスの届かない農村部で、ボランティアとして働くCBRワーカーに、マニュアルを通して基礎的な知識や技術を訓練し、障害者にサービスを提供する仕組みになっています。現在、CBRは規模の差はあれ、アジアの

全ての途上国で実施されています。医療のみでなく統合教育、社会サービスまでも含む理想的な形に発展してきたCBRもあります。が、その多くは医療サービスが主で、専門家が直接現地に赴き現地の人たちを指導、指揮するトップダウン型の、ともすれば施設の出張所が作られたのではないかとと思われるような活動になっています。

ADIはCBRの登場以来、CBRを支援してきました。CBRは発展中の概念であり、今後施設の分権を目指す小施設化の道をたどるのか、障害当事者の参画を中心に据えた自立生活運動に変身するのかの岐路にあります。そのため今後ADIは、日本の障害者がアメリカの自立生活運動を取り入れて飛躍的なエンパワメントを遂げたように、アジアに自立生活の概念を導入する方向を強化しようとしています。CBRを実施している地域の障害者に自立生活の概念を伝えるべく、これまで現地で小セミナーを実施したり、彼らに日本での自立生活の研修に招待したりしてきました。

自立生活運動は、人間としての尊厳をもつて生きるよう選択をする道を開く

大家族で暮らすケースが多いアジアの障害者にとって、まず家族関係の作り方が重要視されます。いつまでも子ども扱いされずに、自分で人生を考えていくことが最初のステップです。彼らは、身につけた自立生活の技能

を、まず自分たちのグループを作って、その自助活動の中で磨きあげていきます。対等に明確に自分の要求を伝える技術、必要な情報を集める技術をもって、政府から広場の使用許可を受けて売店を開店したり、自分たちのプロジェクトに対して外国の基金を得たりと、自助活動が経済的にも発展しています。彼らが自分に自信を持ちながら、着実に生活の質を上げていっているのを見るのは嬉しいことです。

日本の多くの援助団体がアジアの障害者に目を向けるとき、モデルとするのは結局、普段から目にはしている施設中心の日本の施策です。しかしアジアには地域を基盤とした相互扶助組織が存在しており、地域の学校に通うことが普通で、統合教育も尊重されています。施設の数や内容、特殊教育のノウハウが不十分であるからといって、容易に特殊教育や収容施設をアジアに持ち込んではいけません。自立生活運動は、障害者の自立を阻む施設中心主義に対抗して、人間としての尊厳をもつて生きるよう選択をする道を開くものです。自立生活に必要な技術こそ、彼らにとつて貧困から抜け出し、生活の質を上げる今一番必要な適正技術と言えます。

ADIはアジアの障害者の自立を推進するために、アジアでの自立生活概念の普及と自立生活運動の発展、障害者の自助団体への物的、技術的支援、アジア各国の障害者の国際交流プログラムへの支援、アジアのCBRを中心とする障害者問題に関する情報提供、啓発活動、調査研究活動を行ってきました。皆さんにも是非、自立生活運動のアジアでの発展にご協力をお願いしたいと思います。

(要旨)

ESCAP

経済社会委員会

グラフィック

「アジア太平洋障害者の10年」の最終日として、10月28日までの4日間、滋賀県大津市で府間会合をはじめ、障害者の権利の推進を図るため、さまざまな障害のある人もない人も参加した。それぞれの会場で交流が行われました。この笑顔が、障害のある人への理解を深める力となり、社会の発展に貢献する。

▶障害のある人もない人も同じステージに立ち、ベートーベンの第九交響曲「歓喜」を合唱。国連ESCAPの関係者も多数来場し、海外にも「共生」のメッセージを発信しました。

びわ湖大津ESCAP 記念マラソン

[10月27日 ● なぎさ公園サンシャインビーチ周辺]



◀湖岸沿いを3kmと5kmの2コースに分かれて走破！車椅子や歩行器具を使用する障害者も参加できるマラソン大会では、ちびっ子からお年寄りまで、さわやかな汗をかきました。



音楽会

[10月27日 ● びわ湖ホール]

ソースに青のりにマヨネーズ。やっぱり関西人はこうでなくちゃね。



聴覚障害者にも手話による表現で、音楽の楽しさを届けました。

障害者芸術展

[10月24日～28日 ● 大津西武催事場]

国連ES

アジア太平洋総

フ オ ト

国連ESCAPが定めた「アジア太平洋」の最終年に当たる今年10月25日から28日までの4日間、大津市では最終年ハイレベル政府間会議の開催に合わせ、国連ESCAPの設立50周年を記念した「国連ESCAPの歴史と未来」に関する理解や障害者施策の推進を目的とした関連行事が行われました。この行事でも、一緒にがんばった4万人の笑顔が見られました。国連ESCAPが次の10年をリードしますよ。



さわらのアートをテーマに『触覚の庭』と題した展覧会を開催。さわらなでたり、ゆらしたり、つまんだり、十人十色のスタイルで楽しめます。



「触る」という新しい鑑賞体験に、小さな子どもも興味津々。

展示・ポスターセッション

[10月25日～28日 ● 大津プリンスホテル]



障害者福祉のパイオニアである故糸賀一雄氏についても詳しく紹介されました。



会議参加者らに滋賀県の障害者施策やその取り組み、大津市をはじめとする観光情報など、滋賀県を広く知ってもらうための展示が行われました。

ふれあい広場

[10月26日 ● なぎさ公園「市民プラザ」]

◀市民と会議参加者の交流を目的に、参加・体験型の楽しいイベントを実施。市民コンサートやふれあいマーケットなど、みんなの笑顔と歓声が溢れました。

音楽に国境はありません。流れるメロディがすべて！▶



糸賀一雄の思想と実践に学ぶ

『共に生きる社会の実現と、すべての人々の希望をめざして』



左からシンポジストの飯田氏、高田氏、佐々木氏。



大木会の三浦了氏は、糸賀一雄氏の言葉をまじえながら、近江学園をはじめとする施設づくりに共通するもの、糸賀一雄氏の福祉哲学に焦点をあてて基調報告を行われました。



コーディネーターを務めた大谷藤郎氏は、「糸賀精神は障害者福祉において革新的なものであったが、ただ賛美して固定化していくのではなく、新しい時代において継承、発展させていくことをここに誓いたい。」と語りました。



サブコーディネーターの口分田政夫氏は第一びわこ学園園長として福祉分野の最前線で活躍中。

コーディネーター
大谷 藤郎氏
(糸賀一雄記念財団副理事長)

口分田政夫氏
(糸賀一雄記念財団企画検討委員長)

シンポジスト

飯田 雅子氏
(財団法人 鉄道弘済会 総合福祉センター「弘済学園」園長)

高田 英一氏
(社会福祉法人 京都聴覚言語障害者福祉協会 理事長)

佐々木正美氏
(川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学 学科長・教授)

シンポジウムの冒頭では、大木会理事長・三浦了氏による「糸賀一雄人と仕事」と題した基調報告が行われました。糸賀一雄氏の没後三十四年が経過し、福祉の分野でも糸賀氏の人物像や、その思想を知らない世代が増える中、三浦氏が語った糸賀氏の福祉哲学は、時代に先駆けて社会福祉の理想的な在り方を示すものであったと再認識させるものでした。

あわせて糸賀氏の最後の講演となった昭和四十三年九月十七日当日の録音テープが流され、「人間が人と生まれて人間となる。それは本来、社会的な存在であるというけれども、その社会的な存在になっていく道行きというものを私たちは問題にしなければならぬ。(中略)人と生まれて人となる。なるということは、社会的存在であることを証明していくことになる」と、在りし日の氏が会場に流れました。

今、福祉の世界はどこに向かっているか？

大谷 三浦先生のお話をお聞きして、あらためて糸賀一雄先生の偉大さを感じます。偉大であると思うのは、実践と思想を積み重ねていられる中、そこに透徹した哲学的分析がある点です。日本では長い間、障害者の人々は棄民(きみん)と言いましょか、国家が見捨てるような状態が続いていました。戦後になると、今度は過保護になり、しかし一部の人が過保護に扱われ、多くの人は戦前と変わらない状態である。そういった状況の中で、一方では宗教的、道徳的な立場を匂わせ、一方では科学的に福祉の実践と思想を築かれたのが糸賀先生であり、五十四歳の若さで逝去されたことは、哀惜の念に絶えません。

本日、アジア太平洋障害者の十年を記念して、これまで糸賀一雄記念賞

の栄誉に輝かれた福祉の先駆者である皆さんをご招待して、お話を伺うという特別な機会を得ることができました。國松知事はじめ滋賀県庁のご支援に、非常に感激しています。では、シンポジストの三名の方に、今どんなふうに福祉について考えておられるのか、お話を聞きたいと思えます。

口分田 三名のシンポジストの方には、「共に生きる社会の実現と、すべての人々の希望をめざして」というテーマのもと、それぞれの実践分野でどういうことが実現できているか。あるいは、将来どういうことが課題になって残っているかということをお話しいただきたいと思えます。そして、糸賀思想に学ぶものは何か。あるいは、これからの新しい時代の希望につながる新しい生き方や考え方は何か。そういったことにも触れていただければと思います。それではよろしくお願いたします。

施策は必要要件。充分要件となるのは、 介在する人であり、介在する人の 確固たる思想である

飯田 雅子氏

『子どもたちをしっかりと育て、
社会に鉄砲を撃つ』

私が勤務する弘済学園は、近江学園のブランチ施設の一つです。ずいぶん昔、アフターケアセンター（就労支援施設）の開設を控えていた当時、糸賀先生は、『子どもたちをしっかりと育て、社会に鉄砲を撃つんだよ』とおっしゃいました。子どもたち一人一人が玉となって社会に出て行って、社会に自分を出しながら社会を変えていく。この力は本人なのだよ、ということをお教えくださいました。単に社会で暮らせばいい、ではなくて、どういう生き様を示してくれる本人にしていくのかということ、療育の在り方を教わったように今も思っています。

ややもすれば、社会における有用度や、優秀で知的な人間にこそ値打ちがあるといった物差しが横行しています。でも本当は、一人一人生きることそのものに意義があり、その姿に値打ちがあるのです。原点となる人に対する価値観というものを、糸賀先生の思想を踏まえて、社会に再度啓発していかねばならないのではありません。

生きる我が子と向かい合う
勇気を与えた糸賀思想

私どもの学園では、母子入園といっ

て、幼児とそのお母さんに三ヶ月間合宿をしてもらって療育の在り方を探るという機能があります。最近来られたお母さんは、三歳の最重度のお嬢さんをお持ちで、歩くようにはなつたけれども、非常に反応が弱いと。しかし合宿が始まって、しっかりとこちらがアプローチし、インプットすることで、楽しい時には笑ってくれ、自分の行きたい場所に一生懸命動こうとするようになってくれました。それを見て、私たちはとても喜び、これでいいんだと確認をしていたのですが、一ヶ月が過ぎた頃に、お母さんは「笑顔も見られないようになってとても嬉しいけれど、やっぱりこの子を我が子として育てていくときの虚しさからは抜け出せない」とおっしゃいました。

この言葉に出会ったとき、私はその言葉を説得する力を持っていませんでした。虚しいという感情を、何を持たずて癒すことができるのか。宗教色を持ち出すべきかとも思いましたが、宗教心を押しつけることはできません。そこで、あ、そうだと思い、糸賀先生がお書きになられた『この子らを世の光に』という本をお渡ししたので

す。それから合宿の二ヶ月目に入つて再度お会いすると、何だかすこく清々しい顔をしたお母さんになっておられました。お嬢さんの障害は確かに重いが、でもそこにはしっかりと生きていく我が子がいるのだ、という感触を、本の中から得られたのだらうと思えます。本の中に脈々と流れる人の値打ちに対する考え方、それが人間社会の中で人を尊ぶという思想の原点になるのではないだろうか、と改めて確認しました。

どの子どももハッピーでありたい、
をベースとして

近年、「強度行動障害」が話題になっています。自傷、つまり自分で自分を叩くであるとか、お友達を叩いたり噛みついたりする、あるいは物を壊すといった行動が見られるわけですが、本人は「苦しいよ」ということを行動で訴えているのです。しかし、大抵そういった訴えであるとは気づいてもらえません。行動と障害の因果関係を分析

して行動分析を行い、困った行動を解消するために対応策を模索するという作業が行われますが、心の叫びに気づかずして、それだけで行動改善に向けた日々を重ねるといのは、継続できないだらうと捉えています。まず、どの子どもなんだよ、ハッピーでありたいんだよ、ということを通項に位置づけて、行動分析を理解として使いつつながら進めていくことが大切ではないでしょうか。

いま、行動障害の人たちに向けてのスポーツというのは、かなり意識をして施策的にも進んできました。糸賀先生が今おられたら、どこが足りないよとおっしゃるかな、ということも考えながら歩んでいます。施策が進んだからみんなが幸せになるよ、ということではないのです。施策は必要要件ですが、充分要件ではありません。そこに人の介在があり、介在する人がしっかりとした思想を持つ。そこで初めて実る福祉ということを考えて、私もしっかりと歩んでいきたいと思えます。



飯田 雅子氏

糸賀一雄記念賞第1回受賞者（神奈川県）財団法人 鉄道弘済会 総合福祉センター「弘済学園」園長
1959年、日向弘済学園（現在の弘済学園）に児童指導員として勤務。知的障害施設における指導の一貫性を重視し、療育体制の整備発展に尽力。独自の手法による母子訓練制度の導入で、早期母子援助論を深化させるなどの実績を持つ。今後大きく期待される活動の一つに、「自閉症の療育援助理論の体系化」がある。



会場では、三浦了氏の執筆により制作された『糸賀一雄 人と仕事』が参加者全員に配布されました。

聴覚障害者の問題は、聞こえないことではなく、社会的な問題であり、社会を変えることで、健聴者との平等が実現する

高田 英一氏

先進的な思想と社会的な支援が、
障害者の社会を変える

私自身、耳の聞こえない障害者であり、いま福祉関係の事業に携わっているのは、この道を歩くことだけが私の生きる道であったということができません。糸賀先生は障害をお持ちではなかったけれども、生涯を障害者の福祉に捧げられました。そのことに私は大変感動を覚えます。

糸賀先生は、障害について人間としての価値、また権利を発見されました。そして次に、障害児を見るとき、科学的、実証的に研究・調査をするという姿勢をもたれました。ただ援助をするだけでなく、障害の原因と苦しみや困難がどこにあるかということ調べた上で、改善を進められたということに

なると思います。糸賀先生のような先進的な思想と、社会的な支援があった初めて、私たちの社会は進歩していくものではないかと思えます。

音声の日本語が言語であると同時に、手話もまた言語である

耳が聞こえない困難を説明するのは難しいのですが、皆さんがもし外国に行かれて、言葉が通じない人々に囲まれて暮らすとしたら、それがどんなにしんどいか、心細いかということ想像していただくと、それが聾啞者の日常であることを理解してもらえませんか、と思います。

私たち聾啞者の仲間は、手話というコミュニケーション手段を通じて人間関係を築くことができますが、健聴者の社会、音声語の社会は、コミュニケーション手段をなかなか変えることができません。それは同時に、聾啞者と健聴者の人間関係が築けないことを意味し、それが結果的に聴覚障害者に対する差別、あるいは障害となつて現れるのです。誰の責任という事ではなく、お互いに理解しあえないという現実があるのです。

私たちの間でも手話で完全にコミュニケーションができるわけではありません。戦後、日本の聾啞者同士の全国的な交流が始まり、地域によ



シンポジウムの内容は同時通訳され、外国籍の受賞者も熱心に聴き入っていました。(ジュディ・アン・ウイ氏(左)とヴィーナス・M・イラガン氏)

って手話が違うということもわかってきました。そこで私たちは、全国的な標準の手話をつくらうということで、昭和四十四年に初めて『私たちの手話』という本を出版し、これまで『私たちの手話』十巻と『新しい手話』五、六巻を出版してきました。次に、手話と日本語、音声言語の意味の関係付けをはかった『日本語 手話辞典』というものを出版しました。この辞典は新村出版より出版され、広辞苑を最初に編纂された新村出(しんむら・いずる)先生の賞を受賞しました。そのことで私たちは音声の日本語が言語であると同時に、手話も言語である、これで双方に関連するコミュニケーションができるということを確認したわけです。そして、辞典の出版と同じ頃に手話サークルが生まれ、自ら手話を学ぼうという健聴者たちを核にして、聾啞者と健聴者の相互のコミュニケーションや人間関係が確立されてきたように思います。

すべての発展途上国の問題を、
障害者の問題を通して支援

聾啞者と健聴者が阻害されてきたことは、お互いが望んだわけではなく、コミュニケーションが確立できなかったことに原因があると思います。

一九八〇年のことですが、世界保健機関(WHO)が、国際障害分類といったものを発表しました。国際障害分



高田 英一氏

糸賀一雄記念賞第4回受賞者(京都府) 社会福祉法人 京都聴覚言語障害者福祉協会 理事長
36年にわたり、(財)全日本聾啞連盟役員として聴覚障害者の人権擁護および福祉の向上に尽力。運転免許取得や民法11条の改正に取り組み、その組織強化や人材養成に努める。今後は国内における活動はもとより、アジア・太平洋地域での聴覚障害者団体への援助を強化し、未設置地域における組織創立を援助する方針。

類では、障害とは身体的にどこかの器官が損傷しているという問題だけではなく、それによって能力障害があり、またその上に社会的な不利益が重なること。この三つの関連関係を明らかにしました。これは、それまでの私たちの社会に対する働きかけが正しかったことを証明するものではなかったかと思えます。

私たち日本の聾啞者にとって、社会は「ずいぶん住みやすいもの」になってきました。しかし、アジアの実状は大変惨たるものがあります。インドネシア、フィリピン、どこへ行っても聾啞者は孤立しています。健聴者との架け橋もなく仕事もなく、暮らしては困難です。私たちはそういったアジアの問題、またアジアだけでなくすべての発展途上国の問題を、障害者の問題を通して支援していく方針です。そして地球全体を住みよくしていきたいと思っています。そうすることが糸賀先生の教えに沿うことではないかなと思います。

シヨプラー教授の

「自閉症の人たちの文化を尊重したい」という言葉は、糸賀氏の「この子らを世の光に」という思想と大きな共通点がある

佐々木正美氏

「自閉症とは何か？そこから始まった「TEACCH」との出会い」

私が一九七一年から七六年まで、国立秩父学園という知的障害者の人たちの施設に勤める最中、厚生省に当時の言葉で言う異常行動研究班という班会議が形成されました。発達障害の子どもたちにもどのような異常行動、今日で言う不適応行動があり、それにどう対応してどのような成果を挙げているか、または成果を挙げられずに苦慮しているかを研究する会議です。そこで秩父学園から五人の代表的な例、困難な人について報告せよという義務が与えられました。当時、秩父学園では百十二人の人と接していたのですが、施設の職員と相談して、最も困難な五人を結論づけるところ、五人すべてが自閉症だということがわかり、がく然としました。百十二人の中で、自閉症の人はわずか十二人であり、その中の五人が該当したのです。そのときから、自閉症というのは何だろうと考え始めました。

一九八二年、私はノースカロライナ州にあるノースカロライナ大学が、「TEACCHプログラム」という自閉症の非常に優れたプログラムを実践しているという論文を読み、同大学を訪れました。TEACCHとは「自閉症および関連領域のコミュニケーション障害を持った人たちへの治療と教育」という長い英語の頭文字を取ったものですが、訪れてみてプログラムの凄さに驚きました。

ここで実践されていることは、私たちがやっていることは隔世の感があり、すでに多くの成果を挙げていました。自閉症の人が地域社会で穏やかに、平和に生活している姿を見て、このプログラムを日本に紹介したいと強く思い、それ以来、ノースカロライナ州から関係者を招いて、国内で自閉症の人の療育にあたる人たちの訓練セミナーを実施したり、現地のありのままの様子をたくさん映像におさめ、日本語版と英語版のビデオをつくるなどしてきました。

「自閉症の人たちの文化を尊重するTEACCHの姿勢」

TEACCHプログラムは、自閉症をとても見事に理解しているため成功したプログラムです。プログラムの創設者エリック・シヨプラー教授は、最初に出会ったとき、こう言われました。「自閉症の人に、私たちのつくっている環境や文化のさまざまな美しい意味を伝えたいのです」。そして、「自閉症の人たちの文化を尊重したい」ということを繰り返し言われました。このことを私は、糸賀先生の「この子らを世の光に」という思想と、非常に大きな共通点があるように思います。

自閉症の人たちがコミュニケーション障害と言われるのは、よく知られたことですが、彼らは自閉症の人たちと、どのようにすれば意味のあるコミュニケーションができるか、深い意味を共有しあえるかということこそを非常に大切にします。自閉症について詳しくは省略しますが、自閉症の大きな特性は、具体的なものに意味や概念を構成することができない。言い換えれば、想像力やイマジネーションを働かさなければならぬものは、意味や概念にならないということです。例として、一つの部屋なり場所を多目的に使っただけで、自閉症の人たちには場所の意味が失われることになり、混乱が生じます。当時私たちは、一つの教室を勉強の場、休み時間を過ごす場、時にはお弁当を食べる場にも使っていました。そのたびに自閉症の人がどれくらい混乱していたかということに気づきもしませんでした。TEACCHプログラムからすればささいなことですが、こういうことを彼らは非常によく知っていました。

「二十年の成果のカタチ「自閉症力カン」フランスNIIPPON」を開催

私たちは今日になってやっと自閉症の人のバリアフリーを、かなり可能にする方法を教えられました。TEACCHはその方法を「構造化、ストラクチャリング」という言葉を使って説明しています。環境の構造を自閉症の人にわかるように、応用しやすくするように変えるということですが

たとえば、車椅子生活をすすめる人のために段差をなくしてスロープをつくる。これは物理的な構造化です。耳の不自由な人のために手話通訳を入れる。これも特別な構造化です。そういうアイデアを、自閉症の人にはどのようなにすべきか、私たちとの間にあるバリアが少しでも小さくなるか、ということ

とをとても熱心に彼らは考え、実践していった。

こういつたことの我が国への普及を、私なりに一生懸命やってきて、その小さな到達点として、今年九月に、一九八二年の初訪問から二十年を記念して、「自閉症力カンフランスNIIPPON」という交流会を実施しました。日本各地でTEACCHプログラムを実践している人々が一同に集まり、そして、二十年の成果の報告を兼ねてシヨプラー教授をお招きしました。今後はほぼ毎年、次回からは自閉症力カンフランスインターナショナルとして実施される予定です。

今、私は大学に勤めながら、本格的な自閉症の専門家をめざす人のためのナイトスクールをオープンしています。偶然にも現在、厚生労働省は日本の各地に自閉症センターを開設、または開設予定しており、また文部科学省では、大学院の制度に新たなアイデアとして、専門職大学院のコースをつくらうと計画中であることも聞いています。プロフェッショナルなワーカー（専門職員）を育てる場であり、私たちが取り組んでいるナイトスクールが、そのための基盤になればという思いでいます。



佐々木 正美氏

糸賀一雄記念賞第5回受賞者（東京都）川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科学科長・教授

1966年に精神科医としてスタートを切る。自閉症TEACCHプログラムの我が国への紹介は、画期的な出来事として高く評価されている。今後はノースカロライナ大学精神科TEACCH部臨床教授として同プログラムの更なる普及に努めるほか、川崎医療福祉大学で療育援助の専門化の育成に力を注ぐ。



ESCAP事務局長を務めるキム・ハクス氏（韓国）も参加し、受賞者らと意見を交換しました。



ともに第5回受賞者の佐々木正美氏（右）とイラガン氏は、久しぶりの再会に感激。イラガン氏はジャーナリストから福祉の分野に転身した異色の経歴の持ち主です。



第4回受賞者・
ジュディ・アン・ウイ氏（シンガポール）

シンガポール障害者福祉協会会長であるジュディ氏は、「我々は障害のある人たちが光になるべし、と彼らの自立を助けなければならない。そのためにも計画が必要で、それを実行に移すことで人々の可能性を引き上げていくことができるはず。」と語りました。



第5回受賞者・
ヴィーナス・M・イラガン氏（フィリピン）

フィリピン国際障害者連盟会長を務めるイラガン氏は、「障害をもつ人たちが、デメリットという見方ではなく、地域社会にメリットをもたらす存在として見られるようにしていきたい。障害を持つ子どもたちにもすべてのチャンスが与えられるべきで、可能性を持った人になってほしい。」と、言葉を寄せました。



フィン・ヴァン・カム氏を囲んでハイ！ポーズ。レセプションにはベトナムの民族衣装アオザイで参加する女性が多く見られ、会場に華を添えました。

レセプション レポート

Reception Report

シンポジウム終了後に開催されたレセプションでは、第6回糸賀一雄記念賞の受賞者をはじめ、過去第1回から第5回までの受賞者が一堂に会しました。

互いが自由に意見を交わし、エールを交歓する中、海外から駆けつけたこれまでの受賞者らは、自身の近況と、今回の糸賀一雄記念賞を期に、思いを新たに今後の目標や自身の活動方針についてメッセージを寄せました。



あいさつに立たれた山田新二副知事は「糸賀一雄氏の功績をはじめとする先進的な福祉への取り組みが評価され、今回滋賀県において国連ESCAPの国際会議が開催されたことは非常に名誉なこと。」と述べられました。

第2回受賞者● 曾文雄氏(台湾)

台湾盲人重建院院長である曾氏は、「事業に携わって47年、いろいろな壁にぶつかり、そしていろいろな経験を得ました。一年ごとにぼやぼや過ごすことはできないという思いを強くしていますが、糸賀一雄先生の功績を後世に伝えるためにも、何か記念館のような施設があれば、そしてできれば糸賀先生の銅像を我々の力でつくりたいというのが、私の夢です。」と語りました。



今回受賞のマカナワイ氏は、友人である日本人スタッフとともに、フィジーの歌を披露！



第3回受賞者●

スーゲング・スーバリ氏(インドネシア)

リハビリテーション・インターナショナル インドネシア国内事務局長として活躍するスーバリ氏は、「今日はいろいろな話を聞き、専門的なことを学ぶ大切さを改めて感じました。先進国と途上国ではギャップがありますが、今日のように域内の国々が集まり交流することで、その問題の改善も可能になるはず。」と述べました。

今回受賞の中西由起子氏を囲んで、第4回受賞者のジュディ・アン・ウイ氏と高田英一氏。お話にも熱が入ります。



第7回 糸賀一雄記念賞の募集について

生涯を通じて障害者福祉の向上に取り組まれた故糸賀一雄氏の心を受け継ぎ、障害者やその家族が安心して生活することができる福祉社会の実現に寄与することを目的として、多年にわたり障害者福祉の分野で顕著な活躍をされている人に対して「糸賀一雄記念賞」を授与するものです。

実施団体

財団法人 糸賀一雄記念財団

授賞式

授賞式は、平成15年11月に行う予定です。

記念賞の内容

【候補者の対象、資格】

日本、東アジア地域、東南アジア及び西太平洋地域（ただし、オーストラリア及びニュージーランドを除く）に居住し、障害者福祉に関する活動実績が高く評価されており、かつ、今後の一層の活躍が期待される個人とします。

【授賞】

- ・ 2名以内とします。
- ・ 1名につき賞状及び賞金200万円を授与します。

応募方法

- ・ 所定の「第7回糸賀一雄記念賞候補者推薦書」に記入（日本語または英語に限る）し、第3者により応募してください。他薦とします。
- ・ 郵送による応募の場合は、締切日必着とします。
- ・ 以前の応募で授賞外となった人の再応募を妨げません。

選考方法

受賞者は、推薦のあった応募者（前回までの応募者を含む）の中から選考委員会が選考し、理事会の議決を得て決定します。

推薦書の送付及び問い合わせ先

財団法人 糸賀一雄記念財団
〒520-3111 滋賀県甲賀郡石部町東寺四丁目1番1号
県立近江学園内
TEL・FAX 0748-77-0357
E-mail : itogamf@mx.biwa.ne.jp

選考委員会委員

委員長	● 大谷 藤郎	国際医療福祉大学総長 (財)糸賀一雄記念財団副理事長
委員	● 江草 安彦	川崎医療福祉大学学長 (社福)旭川荘理事長
〃	北浦 雅子	(社福)全国重症心身障害児(者)を守るの会会長
〃	京極 高宣	日本社会事業大学学長
〃	鈴木 健二	青森県立図書館長 青森県近代文学館長 青森県文化アドバイザー
〃	徳川 輝尚	全国身体障害者施設協議会会長
〃	福田 雅子	ジャーナリスト
〃	古屋 治男	(財)全国精神障害者家族会連合会理事長
〃	松尾 武昌	(社福)全国社会福祉協議会常務理事
〃	リム・キムラン	国連アジア太平洋経済社会委員会社会開発部部長
〃	山田 新二	滋賀県副知事

募集期間：平成15年2月1日～平成15年5月31日